



地域住人のよすがを育む活動をベースに 「災害で命を失わない」が合言葉



島根県 隠岐の島町西郷中町町内会連合会
会長 大田 耕士

1 隠岐諸島・島後中町地区

西郷中町町内会連合会は本州から 80km 程の日本海に浮かぶ隠岐諸島のうち約 13,800 人が暮らす島後という島に位置しています。当連合会は 9 つの地区約 150 世帯で構成される中町地区の自治会です。

中町は家屋の密集した古い市街地のため、過去には全域が焼け野原になる大火の惨禍を度々受け、ここ 20 年でも 3 件 2 名の命が奪われる火災を経験しています。また、背後は全域が急傾斜地であり、常に土砂災害の危険を孕んでいます。前面は島の玄関口である良港に恵まれ、賑わいをみせていますが、大きな海底活断層が湾口の 50km 程沖合にあり最大想定津波が発生すると、地区のほぼ全域が短時間で浸水するとされています。とは言うものの、日常は災害らしい災害もなく平穏な暮らしが営まれ、住人の多くは、災害を強く意識することもなく暮らしてきたというのが実情でした。

2 地域住人の縁づくり活動と 防災会の結成

しかし、隠岐諸島でも被害があった日本海中部地震の記憶も重なり、東日本大震災は住人の「楽観的に備え楽観的に暮らす」のんびりとした状態から「悲観的に備え楽観的に暮らす」への防災意識の転換を迫ることになりました。連合会は、2010 年から地域防災活動の調査をしていましたので、2011 年度には自主防災会を連合会の活動組織として創立することが出来ました。しか

し、防災会の結成までには幾つかの過程を経る必要がありましたが、そのことが、10 年経っても生き生きと活動ができていることにつながりました。

中町は商店街の衰えや高齢化が進み、住人間のつながりが希薄になり、孤独死も発生するなど深刻な問題も抱えていました。地域再生の活動をどのような理念でやるべきかと考えていたところ、社会福祉協議会が島根大学の先生を中町に招き話し合いや講演を行い、「地域の縁」の大切さ、これを失うことの怖さを教えて頂きました。私達は活動理念と目的を「住人の縁を結び直す」ことに定め、連合会に「えんづくりの会」を組織し、「声かけて笑顔でつなぐわが町を」をスローガンに地域一円縁づくり事業を始めました。約 70 名の活動者が高齢者宅を毎週訪問し、安否を確認し世間話や困りごとを聞く活動を続けています。この事業で利用者と活動者の信頼関係が深まり、今では住人一人一人お互いが大切な存在だと感じるようになりました。防災会も大切な人々を「災害で失わない・失わせない」という考えが浸透しており、防災訓練の際には「えんづくりの会」の人達も多数参加し、大きな支えとなっています。

3 工夫をこらして —面白くもあり厳しくもあり—

防災会は活動の核となる班員が毎年 2 回の訓練を行っており、自然災害を想定した避難訓練には約 150 名が、消火訓練には 50 人程の参加があります。訓練は様々な災害



「災害用心、火の用心」こども防災見回り



消防ホース展張・結合・収納訓練



土砂災害図上訓練



防災会班員による夜間放水訓練

現場に対応できるよう毎回工夫をこらし、また、競技性も取り入れて行っています。その一つの「垂れ幕落し競争」は、標語を書いて巻いた幕4本を吊るし、4チームが放水で幕を開く速さを競うものですが、毎回拍手喝采の人気のある種目です。連合会は性差によって役割分担を固定しないことを活動の基本としていますが、ちなみに一昨年は女性の管鎗チームが優勝しました。訓練の前後には基本訓練も行い、他には災害初期の迅速参集訓練を行っています。

子供も大人も待ち遠しいのが年中行事の「こども防災見回り」です。子供達が地区の家々を「災害用心、火の用心」と訪問し、大人もお菓子を用意して待っています。この行事は子供達が地域を知り、災害時には皆で助け合うことを目的としています。

また、連合会は一時避難所を毎年数回開

設し、6年前からは高齢者の日常の暮らしを支える事業とサロンを行い暮らし易く楽しい地域を目指しています。

4 今後の取り組み

各種災害時における住人の参集基準と初動時の危機管理体制の確立を目指し、住人の防災行動の率先取り組みの促進を図り、早期避難や初期消火につなげ被害を最小限にすることを目指したいと考えています。また、消防機器などの装備の更新と充実を図っていくこととしています。